

「聞く」力は広く深い!!

井上 雅彦(本学教職研究科教授 国語教育学)

みなさんは話したり聞いたりするのは得意でしょうか。このような力はどこで、どのようにしたら身につくのでしょうか?

それは学校教育においては、国語科が担っているのです。国語科では言語能力を「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の三領域に分け、「話すこと、聞くこと」領域は、さらに「話す」、「聞く」、「話し合い」系列に整理して指導します。

「話す」力や「話し合う」力はイメージしやすいのですが、「聞く」力ってどのような力なのか理解するのは難しいのではないのでしょうか。そもそもこれまで聞く力を育てる国語の授業って受けた記憶がないのではないですか。覚えていたとしても、相手の話は目を見て頷きながら聞きなさいと教えられたり、CDから流れてくる会話の聞き取りテストをされたくらいでしょう。しかし、それは聞く力のほんの一部なのです。

「きく」という漢字を書いてみてください。「聞く」「聴く」はすぐに思い浮かぶと思います。この「きく」はどのように違うのでしょうか。「聞く」は耳に入ってくる音をそのまま受け入れるニュアンスがありますが、「聴く」は注意深く、耳をそばだててきく感じがします。英語では「hear(聞く)」「listen(聴く)」という違いです。では、「訊く」という漢字を書いた人はいますか。この「訊く」は尋ねるというニュアンスが強いですね。このように、一言で「きく」といっても、下記のようにいろいろなきき方があるのです(「訊く」は③~⑤に該当します)。

- ①聞き浸る(聞き入る)……鑑賞的に聞く機能
- ②聞き分ける……論理的に聞く機能
- ③聞き入れる……批判的に聞く機能
- ④聞き合う……相互的に聞く機能
- ⑤聞き遂げる……主動的に聞く機能

相手の話を正確にきく力は大切です。しかし、「きく」という営みを創造的にするためにはそれだけでは不十分です。自分の考えをもってきく。次に自分の考え

と照らし合わせながらきく。そして、話を取捨選択しながらきき入れる。その上で自分の考えを作り上げられることが大切です。つまり、「きく」という活動は、目的や相手の理解、相手の尊重と意欲的な姿勢という「受信準備(体制づくり)」から始まり、「受信(相手の意図の理解)」⇔「吟味(共感・批判)」⇔「創造(論理化・イメージ化)」という段階を行きつ戻りつしながら、「発信」へと至ります。

そのため中学校学習指導要領では「聞く・聴く」力と「訊く」力をともに身につけさせようとしています(小学校も同様。傍線が前者、波線が後者の力)。

- 1年 必要に応じて記録したり質問したりしながら話の内容を捉え、共通点や相違点などを踏まえて、自分の考えをまとめること。
- 2年 論理の展開などに注意して聞き、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめること。
- 3年 話の展開を予測しながら聞き、聞き取った内容や表現の仕方を評価して、自分の考えを広げたり深めたりすること。

また、きき手には次の4方面へ意識が働きます。

- A、対事意識(話されている内容への構え)
- B、対他意識(話している相手への構え)
- C、対自意識(聞いている自分への構え)
- D、対言語意識(話されている言葉への構え)

Aが話題になっている事柄について理解を促し、自分の世界を拡充していくことにつながります。また、Bが自分とは違う存在に気づき、他者を尊重することにつながっていきます。そしてCが、聞くことを通じた自己拡充と自己の確立に結びつきます。加えてDが言語感覚を磨き、音声言語能力の向上に資することになるのです。このように聞く力はとても幅広く、かつ大切なものなのです。

R RITSUMEIKAN